



## 第5回

## 学会連合？

## 学

会運営検討委員会という委員会があって、そこで学会の将来像に関する議論が活発に行われている、ということはずで述べた。先日の委員会では、「学会連合」という考え方が話題に上った。検討委員会で議論されていることはやがて公になることであるし、途中でいい加減なことを書いてはいけないので、ここでは委員会の議論について詳しく述べないが、このような考え方のものは昔から多くの人が述べているので、これについて少し書いても問題ではなからう(などと、いまさら気にしても仕方がないのであるが)。

先月のコラムで日本ソフトウェア科学会のことを述べたし、人工知能学会、言語処理学会、ヒューマンインタフェース学会、日本バイオインフォマティクス学会の名前をあげた。このような小学会は、それぞれの事情によって作られ、それぞれの存在意義を持っているので、それらをなくしてしまつて情報処理学会に統合しようというのは乱暴な考え方に過ぎないと思う。ただし、情報処理学会がそれらの学会と何らかの友好的な関係を維持し、情報系の学会連合としてのプレゼンスを世の中に示すことができれば、これは非常に喜ばしいことである。そのような学会連合を可能にする1つの方策は、情報処理学会が情報系の学会運営のノウハウを蓄積して、情報処理学会の傘の下で一緒にやつた方が楽だし得だ、という風に小学会に思わせることである(と書きつつも、そんなこと、できっこねえだろうなあ、と最近またCMに出ている松鶴屋千歳のようにつぶやいてしまつのであるが)。ただし、そのような事例がないわけでもないことに気が付く。たとえばプログラミンングシンポジウム(以下、プロシンと略す)である。プロシンの活動が情報処理学会の下で行われるようになった経緯について、私はよく知らないのであるが、いま

萩谷 昌己

(東京大学ノ調査研究運営委員会委員長)

のところ、プロシンの内容はともかくとして、プロシンは情報処理学会の傘の下で非常にうまくやっていると思う。残念ながら今年の正月のプロシンにも行けなかったし、夏の池田町のプロシンにも行けなかった。まことに残念である。そういえば、研究会(調査研究運営委員会)には、全国大会の委員を出せとか、IFIPとの関係を考えてとか、プログラミンングコンテストのアイデアを出せとか、学会(理事会)からいろいろな依頼がくるが、プロシンに何の依頼も行かないのはなぜであるのか。プロシンは完全に独立採算でやっているからなのか。高貴過ぎて近寄り難いからなのか。それとも、学会から見捨てられて何の期待もされていないからなのか。プログラミンングコンテストのアイデアを出せという依頼など、まさにプロシン幹事会に出してしかるべきものである、と思つてしまつのである。実際に、夏のプロシンでは「大人のプログラミンングコンテスト」という企画があつて盛り上がったそうである(こんなことを書いたお陰で、本当に依頼が行つてしまったらごめんさい)。

話が脱線してしまつたが、ともかく、情報処理学会の下で活動した方が楽だし得だ、という考え方が成り立たないわけではないようである。しかし、学会連合という可能性について考えるならば、次の2つの大きな問題を克服しなければならない。

1つは、先に述べたような学会運営のノウハウ、特に情報系の学会運営のノウハウを蓄積して、レベルの高いサービスを効率よく、しかも、安価に提供できるようにすることである。

もう1つは、ブランド力である。独立した小学会でいるよりも、情報処理学会の傘の下にいた方が、ネームバリューもあるし、世の中の評価も確立する、ということである。これには決して「まかしは効かない。情報処理学会が最先端の研究や技術革新の一端を担い、かつ、そのことが世の中にはつきりと見えるようにしなければならぬのである。

(平成13年10月14日受付)

